江田苑神話～エデンの園～

茶都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江田苑神話～エデンの園～

【Ｎコード】

Ｎ６４９１Ｎ

【作者名】

茶都

【あらすじ】

日本屈指の名門校に通う女子高生、江田苑（えたその）。彼女の高校に転校してきたのは有名な神話のアダムとイヴだった。「江田苑ってエデンの園って読めますね」この発言をきっかけに想像もしていなかった世界に旅することになる。神が神に封印されて世界が大変なことになると突然聞かされ、訳もわからず神様退治へーー。十二の神に助けを求め、誰よりも勇ましく生きていった一人の女の子。多くの苦難を乗り越えていくその姿は神にも負けず！　そんな神話をご覧あれ！

プロローグ

あたり一面暗い闇に覆われている。――いや、広い広い宇宙が広がっているというべきか。いつからか当たり前のように存在しているその空間に、一人の男が立っている。

「上出来だ。……おや、これだけでは命は続かないか。少々骨が折れるが仕方ない」

長い一枚の白い布をまとった男は両手を勢いよく合わせ、ゆっくりと開いていく。その手の間には、米粒程度の小さい青と緑の球体が出来ていた。ソレはどんどん大きくなっていき、次第に見覚えのある球体――、地球へと姿を変えた。男はその球体の上部に広い土地を作り、2体の樹と草、食べ物、それから男の人間と女の人間を一人ずつ作った。

男はその人間に言った。

「私の姿に似せた作った命よ。男、お前をアダムとし、女、お前をイヴとする。お前たちにはひとつ守らなければいけないことがある。あの2体を命をはってでも守りなさい」

男は丘の上にある2体の樹を指す。ちょうど太陽の眩しい光が当たっていてその樹はよく見えなかったが、二人の人間は大きく頷いた。

「それより二人共……恥ずかしいから服を着なさい！」

男は恥ずかしげに顔を赤らめる。その発言で人間二人も恥ずかしそうに服を着た。

「アダム、しゃべれるかい？」

「うん」

「こら。分るだろう？私には敬語を使うんだよ」

「……はい」

アダムは嬉しそうに笑った。その容貌はとても穏やかで、とても可愛らしい。

「イヴも言葉がしゃべれるね？」
「はぁ～いっ！」
「元気だね。イヴは」
「へへ～」
おてんばな性格のイヴは性格とは違い、容姿はとても美しく「大和撫子」という言葉が合いそうだった。
「二人とも、よく聞くんだ。私の名はヤハウェ。ヤハウェ・エロヒム。この世界は私が作った。ここにあるものは、私、アダム、イヴ、私たち三人で好きにしていいんだ。あと、もし私に何かあったら……全力で助けてくれ」
そう言って男は仕切りなおすように咳払いをすると、妖しい笑みを浮かべる。
「それでは私の世界を作ろうか――――」

第1話　江田　苑

日本屈指の名門校、私立聖美川高等学校。ここの生徒はミニスカート・腰パンブームや、地球温暖化で、ひどく熱くなった夏の日差しを全く感じさせないような服装をしている。そう、膝丈まである黒いプリーツスカートに白い半そでシャツ、指定の紺色のネクタイスタイルの女の子と、黒いズボンをきっちりはいている男の子だ。男の子はみんな髪が短く、女の子はみんな長い髪を結っている。

私立美川高等学校はいわゆるお嬢様学校で、ここに通っているほとんどの生徒が社長令嬢だったりする。

学校の正門に続いている坂を登って登校している生徒の中に、ひと際美人の女の子がいた。全身学校指定のものに包まれている彼女は、手でパタパタと顔を仰いでいる。ポニーテールの黒い長い髪は、この暑さの中でも、どこか神々しく光っていた。

「あ～あっつい」

彼女の名前は江田（えた）苑（その）。父は有名な科学者、母は大学で理科教授をしている。いわゆる理系家族だ。もちろん苑も両親同様に理系の授業が好きなのだ。

彼女は学校に着くと、まっすぐ自分の教室へと向かう。学校の生徒や先生とすれ違うたび「ごきげんよう」と立ち止まって挨拶をする。これも、校則のひとつなのだ。

しばらく歩くと、1年生の教室が並んでいるところが見えてくる。1年生の教室は、学校の最上階の4階にあった。苑はその並びの端まで歩いていき、1－Aとかかれたプレートがぶら下がっている教室に入っていく。

苑が教室の自分の席に座り荷物の整理をしていると、ホームルームの始まりを知らせるチャイムが鳴った。それと同時に、出欠確認帳を持って担任の女の先生が教室に入った。

「みなさんごきげんよう。早く席に着いてください。ホームルーム

を始めます。……えーそれでは、今日の日程は……」
先生はいつもと同じような内容の話を進めていく。苑は一番後ろの席で、眠そうに聞いていた。
「それでは最後に、皆さんに嬉しいお知らせがあります」
先生がそう言うと同時に、眠そうに聞いていた大半の生徒達が何かを期待するようにパッと顔を上げた。
「今日はこのクラスに転校生が2人来ます。どうぞ入ってください」
ガラガラと教室のドアが開いていく。廊下から現れた2人の転校生は、なんの緊張もないように見られた。
「自己紹介をお願いします」
先生が自己紹介を促すと、男の転校生のほうが話し始める。
「宮部拓郎（みやべたくろう）です。父の仕事の関係でこちらへ転入しました。どうぞよろしくお願いします」
見るからに穏やかそうな風貌をしている拓郎は、にっこりと笑った。
拓郎は、髪は短く前髪は眉毛にも届かないくらいで、制服は指定通りにきちんと着ていて、髪色も暗い茶色と、そんなに目立つ感じではなかった。強いて他の人と違うところを挙げるなら、右側の髪だけ長いことと、右目の下に赤いホクロのようなものがあることだ。
拓郎の自己紹介が終わった後、女子生徒が口々に「爽やかですわね」「かっこいいですわ」「美しい方ですわね」と言っている声が聞こえる。
拓郎が嬉しそうな顔をしていると、もう一人の転校生が自己紹介を始めた。
「山田花子です！　まーなんかいろいろあって転入してきました！
一応言っておきますけど、退学喰らったわけじゃないでっす。よろしくお願いしまーっす！」
教室内がざわつく。
「山田さん……指定の格好してって言いましたよね！？」
「えー、だって先生、女の子はいつだってオシャレじゃなきゃ☆」

舌を出して可愛くピースとウィンクをする。花子は、髪は短めで前髪は少しあるくらい、左の髪が長く、左眉の上に拓郎と同様に赤いホクロのようなものがある。さて、問題はここからだ。髪色は赤。星型のピアスと十字架が二つ付いているピアスをしている。指定の制服はスカートくらいで、それでも丈はすごく短い。黒い半そでポロシャツにピンクの大きいネクタイ、ピンクと白のしましま二―ソックス。この学校にはいないタイプだ。当然クラスの生徒の反応も、拓郎の時とは違い批判的なものになる。

「あー……私とは仲良くできないのか」

へこんでしまった花子を庇うようにして先生が口をはさんだ。

「山田さんはこのような服装ですが、学力はこの学校で1，2を争えるくらいなんですよ」

「先生、その方が江田さんを超えられるようには見えませんわ」

「江田さん？……あぁ、まだ一年生ですのにこの学校で一番の成績だったわね」

苑は急に話を振られてびっくりした顔で目を泳がせている。

（なんで私の名前なんてあげるのよ～……。関係ない人を巻き込まないでほしいわ。大体どんな格好でもいいじゃない。仲良くすれば……）

苑は面倒だと思いながらそれを口に出さずに、必死に爽やかな笑顔を作った。

「私なんて大したことな」

苑が話している最中に、女子生徒が割って入ってきた。

「次の学力テストで江田さんに勝ったらクラスの一員として認めますわ」

「えーっと、や、山田さん、どうし、ます？」

すっかり困り果てている顔の先生が断ってくれると信じて花子に聞く。が、当の花子は怒りやら楽しみやらを混ぜた複雑な笑みを浮かべている。背中に怒りの炎を纏っているように見える花子は誰から見ても断るようには見えなかった。

「もちろん受けてたーつ！」
「……山田さん、後で職員室へいらっしゃい」
「え……あ、はい」
　我に返った花子は静かに怒っている先生にたじろぎながらも返事をした。
「二人の席は廊下側の一番後ろと一つ飛ばしてその隣です。早く座ってください」
「はい、分りました」
「了解でーすっ」
　そう言うと二人は席に着く。その席は、苑の両隣だった。苑は気まずそうに頭を下げると一人どうしようかと考えていた。そんな苑に一番に声をかけたのは拓郎だった。
「あの、これからよろしくお願いしますね」
　苑はゆっくり顔をあげて拓郎を見る。苑の目から見ても、拓郎は落ち着く雰囲気を持った美形だった。
「あー……こちらこそよろしくお願いします。えっと、宮部くん」
「はい！　ところでお名前」
　名前を聞こうとすると花子が割って入った。
「ちょっとお隣さん」
「はい？」
　苑は恐る恐る花子のほうを見る。
「あなただけは私に偏見持ってない感じがしたのよねー。よろしくねっ。あたしのことは花子って呼んで」
「え、あ、うん。分りました」
　満面の笑みで話してくる花子に気おされて、何となく余所余所しい敬語になってしまう。花子は本当にオシャレが好きなだけで、話すと案外、この学校のお嬢様とも仲良くなれそうな感じだった。
「ところでさ」
　花子は真面目な顔に切り替える。
「エタサンって人はどれくらいすごいの？」

「そんなにすごくないよ……」
苑は「その話題か」と言わんばかりの苦笑いで答えた。そこに、花子の前の席の女の子が加わってきた。
「とにかく凄い人ですのよ。江田さんのお父様は有名科学者で、その血を見事に受け継いだ方ですわ」
「それ親がすごいだけじゃん」
花子は間をあけずに言った。
「ところでその人何組なのよ」
「このクラスですわよ？」
「このクラスか！　エタサンは挙手しなさい！」
花子はクラス中に聞こえる大きい声で言った。苑は挙げにくそうにしながらゆっくり小さく手を挙げた。花子はあたりを見回しているがそれに気付かない。
「エタサンどこだー！」
「あの……」
苑が声をかけた。
「ん？　どうしたのお隣さん。手なんであげてるの？」
「わ、私が……江田苑だからです」
「えーーーー！？　あんたが江田さんだったのか！」
「はい……」
「まぁ、その、よろしくね？」
「はい……」

第2話　山田花子

拓郎と花子が転校してきてから一週間が経った。
今日は１－Ａが待ちに待っていたテストの順位発表日。トップ１０位までの発表が放送で行われる。教室の中では生徒全員が静かに自分の席に座っている。
ガガガッ。
放送のスイッチが入った雑音が聞こえた。
苑と花子はお互いを見る。顔を近づけて小さい声で話す。
「苑、面倒な事に巻き込んでほんとごめんねー」
「別にいいけど……手加減しなくて大丈夫だったの？」
「わたしをなめちゃあいかんよ」
フフンと得意げに笑う花子を苑は呆れるような顔で見た。その時、ついに放送が始まった。
「みなさん、ごきげんよう。全校生徒学力テストの結果を発表します。１０位、相田理恵さん」
放送委員の女子生徒が下から順番に発表していく。
「３位、宮部拓郎くん」
教室中がざわめいた。拓郎本人は、まるで自分の名前なんて呼ばれていないかのように、落ち着いていた。自分が注目を集めていると気づき、いつものスマイルで一言だけ言った。
「あまり騒ぐと放送が聞こえませんよ」
拓郎のその声を合図に、教室の中にまた緊張が走る。
「２位……」
苑が唾を飲み込む。この学力テストで１位が取れなければ、クラスのみんなに認めてもらえない人がいる。だから苑は前日に、花子に手加減をしようかと話を持ちかけていた。だが花子は、そんなことされたらつまらないと、その案をけってしまったのだ。苑は自分の実力が３年生よりも上だと知っているからこそ余計に緊張してい

た。
「……江田苑さん」
苑は脱力した。ふと隣の花子に目をやると、いつもと変わらない、無邪気な笑顔で楽しそうに次の放送委員の言葉を待っている。自分の名前が呼ばれると決まっているわけではないのに、花子は呼ばれると分っているような自信で満ち溢れていた。
「1位、山田花子さん。以上で放送は終わりです。テストお疲れ様でした」
放送の雑音が消える。
「……山田さんすごいですわね！」
「いやぁ～、それほどでも～。花子って呼んでよ！」
花子は嬉しそうに言った。体は前のめりで、みんなと打ち解けた感じだった。が、感動していた生徒達の表情がだんだんと濁っていく。
「いえ、その、山田さんとよばせていただきますわ」
「なんでよ～。そこまで仲良くはしないみたいな？」
「そうではなくてその……」
花子と直接会話している、花子の前の席の女の子の顔が、だんだんと赤くなっていく。それにつられるようにクラス中の人が黙ってしまう。そしてみんなの視線は苑に集まっていた。苑は花子の肩にそっと手を置いた。
「え、何、苑？」
「花子、多分みんなね、どこにでもありそうな定番の名前ナンバーワンの花子って名前を呼ぶのが恥ずかしいんだと思うな」
苑は途中から花子の顔を見ないで話した。申し訳ないからではなく、肩を小刻みに震わせ、笑いを堪えている。
「あぁ、なるほど」
どこかぼけーっとしている顔で花子は返事を返した。その時、教室で笑い声がした。
「花子なのにそんなに派手だなんて、見た目と合わなさすぎですわ」

「あたしはこの名前気に入ってんのよ！」
花子は恥ずかしそうに笑った。その光景を微笑ましく見守っていた先生は授業のチャイムを聞いて席に座るよう促した。
授業が始まると、全員が静かに真面目に取り組んでいる。苑の机にメモが飛んでくる。そのメモを開くと、花子からの手紙だと分かった。手紙には『苑は神様って信じてる？』と書いてあった。その手紙に『信じてるよ』と書いて投げ返した。

――神を信じているよ。

第3話　宮部拓郎

キーンコーンカーンコーン。
奇麗だが、年季の入ったチャイムの音が鳴る。授業終了の時間だ。
生徒達が次々と教科書を机の中にしまっていく。そんななか、拓郎は教科書には目もくれず、苑の方を向いて座りなおす。
「さっきはなんの手紙を回してたんですか？」
拓郎はニコッと爽やかスマイルで尋ねる。
「あー……さっきのは」
苑が答えようとすると、次の授業の準備をやり終えた花子が体を乗り出す。
「苑は、神様信じるんだって～」
「いきなりなんですか」
少しの間ポカンとしてしまった拓郎は、瞬時に我を取り戻して、いきなり割って入ってきた花子に聞いた。
「だぁかぁらぁ、手紙の話！」
「なるほど。つまり、神様を信じる、という内容の紙を回してた、という事ですね？」
拓郎は爽やかに花子を受け流し、苑の顔だけを見て確認した。花子は拓郎に怒りの眼差しを向けているが、拓郎は全く気にしていない様子だった。
こんな話をしているうちに次の授業のチャイムが鳴る。
「ようやく最後の授業だぁーっ！　帰れると思うとどんなに嬉しいことか！」
花子は手を大きく真上に伸ばして背伸びをした。
「あの、苑さん」
「なんですか？」
「放課後ってお時間ありますか？　もし大丈夫なようでしたら、お話したいことがあるのですが……」

拓郎は真剣な顔で聞いた。クラスのどこかから「告白かしら」「拓郎君好きな人が……」という女子の面白がっている声とショックを受けている声が聞こえる。が、苑自体は全く気にすることなく、いつもと変わらない様子で「うん、いいよ」と答えただけだった。

＊＊＊

授業は一日六時間目まであり、今、１日の学校の終了を教える六時間目終わりのチャイムが鳴った。生徒はバタバタと帰る準備を始めていた。だが、拓郎、花子、苑の３人だけは鞄に手を触れず、担任の先生が来るのを思い思いに待っていた。

ガラガラと教室の扉が開く音がする。１－Ａの担任の先生が教室に入ってくる。生徒が席に着くと、帰りのホームルームを始めた。

「……それでは、今日はこれで終わりです。起立！　礼！　皆さんごきげんよう」

教室に「ごきげんよう」という声が響く。先生が教室を出ていくと、生徒もそれに続く様に次々と出て行った。

「それでは、ごきげんよう」

「ごきげんよう～」

花子、苑、拓郎以外の生徒は帰り、教室には三人だけが残されていた。それぞれ自分の席に座っていた三人だったが、ふと拓郎が席を立った。自分の椅子を持って花子と苑の間に置き、そこへ座る。苑は拓郎の動きを目で追い、拓郎が再び座った時、一瞬怪訝そうな顔をした。

「……宮部君、あのさ」

我慢しきれなくなった様子で苑は声を出した。拓郎はそれを優しく遮るように言った。

「是非、拓郎と呼んで下さい」

「いえ……それは」
「呼んで下さい」
苦笑いで話をする苑に、拓郎は優しい笑顔で、あくまでやんわりとお願いをしている、という体で言葉を発する。しかし、拓郎のその様子は「呼び捨てで呼べ」と強要しているようにも見えた。
苑はそんないつもの様子とは違う拓郎に気圧されるようにして目をキョロキョロさせた。
「えーっと、じゃあ、拓郎って呼ばせていただきますわね」
「はい」
拓郎はニコッと笑う。その時、自分の机にうずくまって寝ていた花子がガバッと体を起こした。
「あたしん事も呼び捨てにしてー！！」
机を勢いよく叩いて立ち上がり、両手を広げる。拓郎と苑は急に大きな音がしたことに驚いて、体をビクッとさせた後、一瞬止まってしまう。苑はあきらめたように肩を落とす。
「はいはい、分かっています」
「よっしゃあ！　……ところで拓郎もう話は終わったの？」
「いえ、終わるどころか始まってすらいませんよ」
花子は拓郎に「けっ」と言うと、ようやく椅子に座り直した。
「苑は、神様信じるって言ったじゃん？」
「うん……まぁね」
「アダムとイヴの話って知ってる？」
「世界で最初の人類で、禁断の果実を食べて知恵をつけて、神様にエデンの園を追い出されたってやつ？　旧約聖書の創世記だったかしら」
「そうそれ！」
前に乗り出して話す花子を押し戻すようにして、拓郎が乗り出す。
「人の魂は、輪廻する。私たちがそのアダムとイヴの魂を持つ者、と言ったらどうします？」
「……え？　……は？　何言って」

「百聞は一見に如かず、だヨ！」
花子はにこっと笑って、立ち上がった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6491n/

江田苑神話～エデンの園～

2010年10月8日14時20分発行